

# 埋蔵文化財 愛知

No. 9



## 朝日遺跡の白転用井戸

朝日遺跡から、弥生時代中期末に属する木製臼を転用した井戸を検出した。木製臼の上半分だけを残し、真中を削り抜いて、倒立させたものを4段重ねている。高さ1 m、臼の切断面の直径は30cmから50cmと差があり、特に2段目では欠損した部分を木製の鋤や鍬の未完成品で外側から補強している。

## 昭和 62 年度 事業 計画

### ● 埋蔵文化財発掘調査及び報告書の刊行

名古屋環状2号線の建設に伴う事前調査など、約62,350平方メートルの発掘調査と埋蔵文化財発掘調査報告書の作成を行います。

- 名古屋環状2号線関係 約36,300m<sup>2</sup>  
(1.朝日 2.小田井 3.比良 4.勝川)  
(5.町田 6.松河戸遺跡)
- 国道23号線岡崎バイパス関係 約 3,750m<sup>2</sup>  
(7.中原 8.小島 9.西山 10.藤井遺跡)
- 勝川地区土地区画整理関係 約 2,800m<sup>2</sup>  
(11.勝川遺跡)
- 県道清洲新川線関係 約 4,800m<sup>2</sup>  
(12.清洲城下町遺跡)
- 五条川改修関係 約 3,200m<sup>2</sup>  
(13.清洲城下町遺跡)
- 国道 151号線バイパス関係 約 7,000m<sup>2</sup>  
(14.杉山 15.諏訪遺跡)
- 県道蒲郡碧南線関係 約 4,500m<sup>2</sup>  
(16.岡島遺跡)
- 報告書の刊行  
勝川遺跡 (国鉄瀬戸線関係)  
杉山遺跡 (国道 151号線バイパス関係)

阿弥陀寺・大淵遺跡 (福田川整備関係)

### ● 発掘調査技術等研修会の開催

市町村の埋蔵文化財担当職員を対象とした研修会を開催します。

- 基礎研修会 2日間 募集人員 30名
- 専門研修会 2日間 募集人員 25名

### ● 広報紙誌の発行

発掘調査の動向・情報をお知らせします。  
「愛知県埋蔵文化財情報」の発行 年1回  
「埋蔵文化財愛知」の発行 年4回

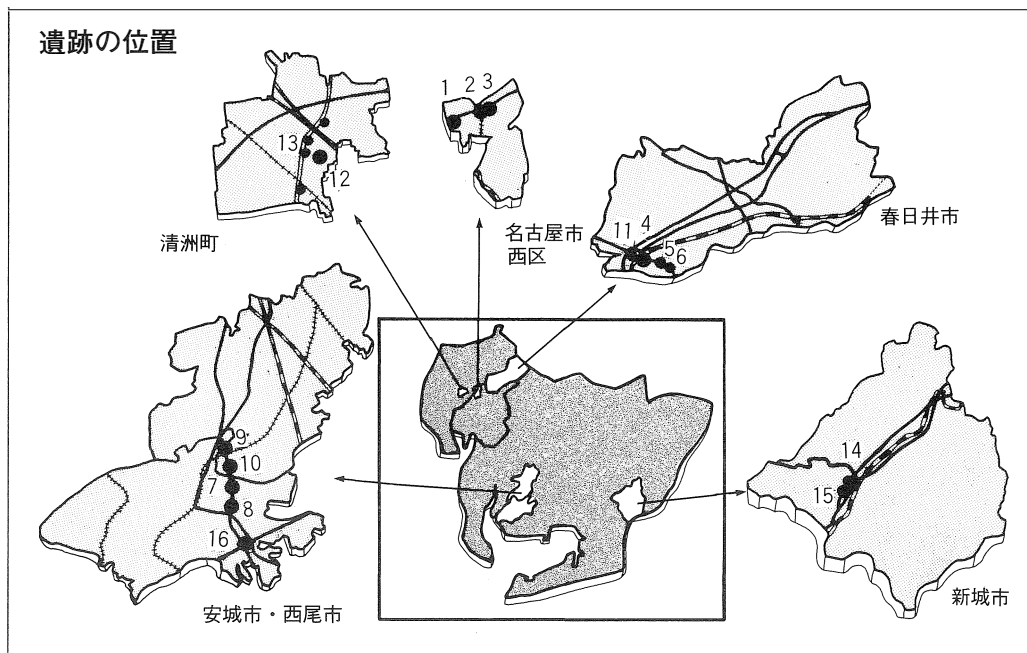
### ● 埋蔵文化財展の開催

埋蔵文化財センターで発掘調査した出土品を尾張・三河の2会場で一般公開します。  
三河会場 豊田市棒の手会館 8月中旬  
尾張会場 愛知県埋蔵文化財調査センター 12月上旬

### ● 埋蔵文化財講演会の開催

学識者による講演会を埋蔵文化財展の期間中、尾張・三河の2会場で各々1回行います。

以上の事業を行うため10億 8,788万 9千円の予算を計上しております。



## 愛知県教育委員会実施の調査事業

### 愛知県教育委員会文化財課

県教育委員会は、遺跡の周知徹底を図り、開発事業との円滑な調整をすすめていくために、その基本的な資料作成事業として、関連市町村の協力のもとに次に掲げる調査を継続的に実施していく。また、本年12月開所予定の愛知県埋蔵文化財調査センターの建設をすすめる。

#### (1) 愛知県内古窯跡群詳細分布調査事業

##### 一 知多半島地域 一

本事業は県内に所在する古窯跡の所在位置、現況等を把握し、分布図や台帳カード、報告書等の記録作成を行うもので、昭和52年度に開始して以来、すでに猿投山西南麓古窯跡群・尾北古窯跡群・三河地区古窯跡群・瀬戸古窯跡群・渥美古窯跡群について調査を完了してきた。

本年度は、昨年度にひきつづき知多半島地域所在古窯跡について分布調査を実施する。調査は名古屋大学文学部橋崎彰一教授の指導のもと、同助手斎藤孝正氏を調査主任とし、文化財課職員・同研究室学生・地元研究者により現地踏査をすすめるもので、調査結果については「愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅵ）」にまとめ、開発関連部局・研究機関等に配布し活用し供する予定である。

#### (2) 遺跡地図作成事業

遺跡の周知徹底は埋蔵文化財保護の基本であり、詳細かつ確かな遺跡地図の作成は保護行政をすすめる上で必要不可欠なことからである。

本県では昭和47年度に「愛知県遺跡分布図」を発刊して以来、発見された遺跡数も多数にのぼっているため、昭和59年度より遺跡地図改訂作業を実施している。この計画は、尾張、西三河・知多、東三河の3地区に区分して、それぞれ2か年を要し3分冊の分布図を作成していくもので、昭和61・62年度は西三河・知多地区分布図を作成する。

今回の遺跡地図では、現地踏査等に基づいて可能な限り遺跡範囲と所在地番とを明示するよ

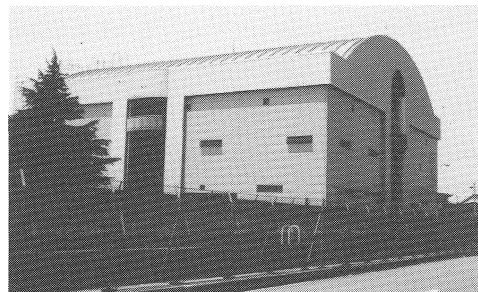
うに努めるものとし、遺跡番号は市町村別の一連番号で表示していく。遺跡表示記号は文化庁発行の全国遺跡地図のものを踏襲し、加えて国・県・市町村指定史跡・名勝・天然記念物についても登載対象とする。また完全に滅失した遺跡についても、残存するものとは表示色を区別して記載する。

こうした遺跡の周知作業は県のみが行うことがらではなく、同様に市町村もすすめていくべき業務である。このため、各市町村におかれても、今回の趣旨を充分に理解されて管内遺跡地図作成に努められることを期待したい。

#### (3) 愛知県埋蔵文化財調査センター建設事業

前号で完成予想パースを載せて紹介した愛知県埋蔵文化財調査センターの建築は、本年9月竣工、12月開所を旨として順調にすすめられている。建物の本体工事は、すでに前年度中に出て上って大きな体軀をみせており、4月以降内装工事にとりかかっている。今後は敷地内の環境整備をすすめるとともに、建設担当の建築部より引継ぎを受けた後、備品類の整備・移動を行い、開所に向けた最終準備に入る。

なお、これにより県教育委員会では、4月1日、愛知県埋蔵文化財調査センター条例と同所々員として所長一主査の職制を設置した。センターの管理運営・財団法人が行う発掘調査の連絡調整・埋蔵文化財に関する各種普及事業等を実施し、文化財課・財団法人愛知県埋蔵文化財センターとも協力して、本県埋蔵文化財保護行政・調査研究の充実に努めていく。



シリーズ 古墳の時代

## 新しいムラの誕生

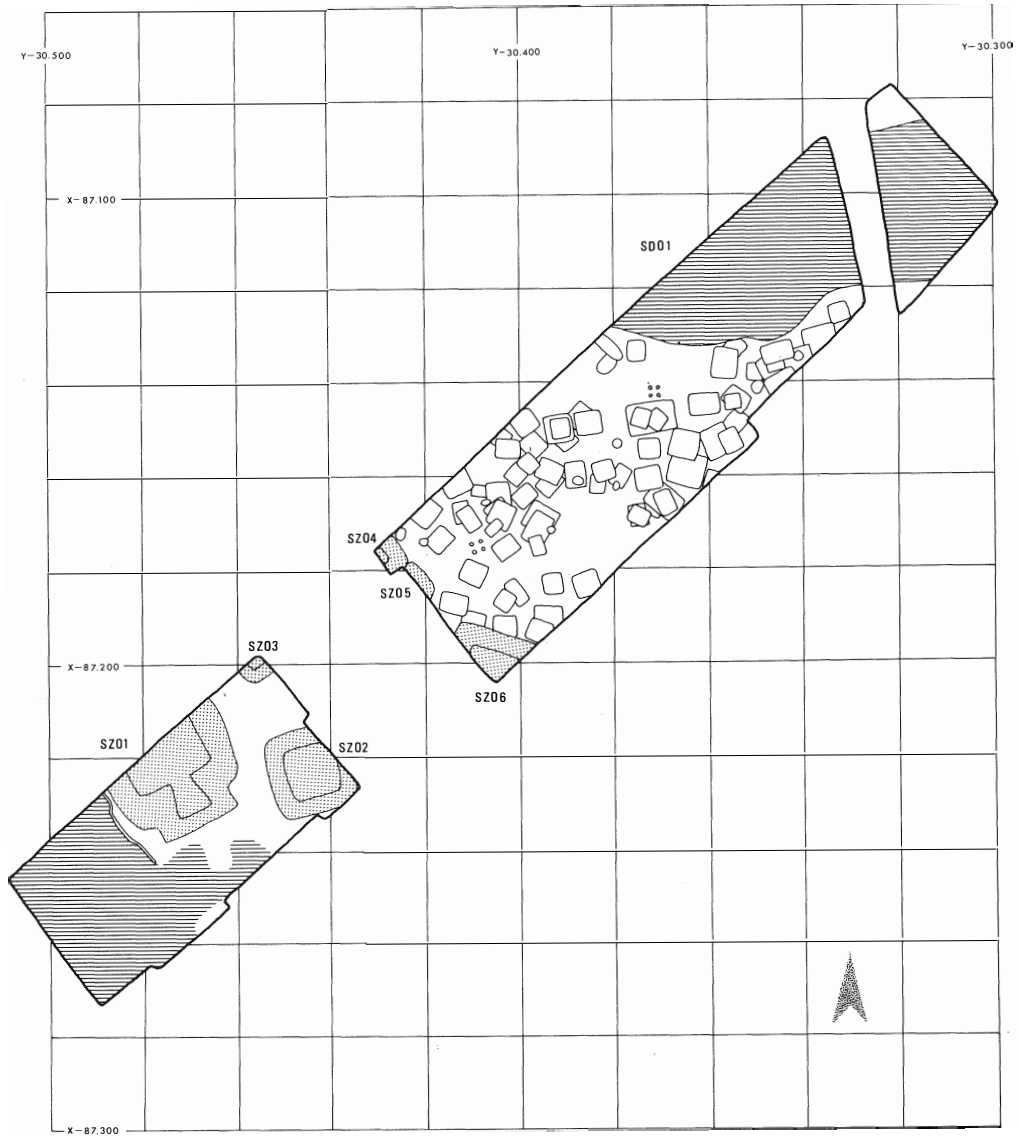
木曾三川が浩々と流れる広大な濃尾平野は、東高西低の地形的特色をもち、ために低湿地帯は養老山脈に向かって美濃側に集中する。それは現在の海岸線から40キロメートルも離れている大垣市域ですら海拔5メートルの低湿地帯に所属しているという壮大な湿原地帯を生み出していることにもなる。一方濃尾平野の北側である山麓地帯では各水系単位で扇状地が発達し、また洪積台地面も随所に見られる。古代東山道はこれらの扇状地・台地面端をその主要な経路として設定しており、したがって古墳時代のモニュメントである大型古墳群は古代東山道沿いを中心に展開しているといっても過言ではない。

ところで弥生時代のはじめより継続する大集落の多くは広大な低湿地帯を中心に早くから定着しており、豊かな自然の恵みを受けつつ海岸線・河口部周辺の微高地上に生活を営んでいたものと思われる。その代表的な集落として愛知県西春日井郡清洲町に所在する朝日遺跡がある。こうした弥生時代でも早い段階から定着してきた大集落は、古墳時代が近づくにつれてやや複雑な状況を見せてくる。そしてそれはやがて集落そのものの解体という現象で終焉を迎える。濃尾平野を中心に活動してきた拠点的な大集落は次々と解体・消失し、かわってこれらの大変動に呼応するかのように新しい集落が爆発的にこの湿原地帯に出現してくる。この激動する時代こそやがてくる新しい時代・古墳時代への胎動と考えることができるのである。こうした大変動期に誕生した新しいムラの一つに廻間遺跡がある。

廻間遺跡は愛知県西春日井郡清洲町に所在し、調査は昭和60・61年度に(財)愛知県埋蔵文化財センターにより名古屋環状2号線建設に伴う事前調査として実施された。その結果弥生時代末から古墳時代前半にかけての集落遺跡として、現在までに竪穴住居跡72軒、墳丘墓6基が確認されている。遺跡は現在の五条川自然堤防上の西端に立地し、その北には幅30メートルの旧河道が存在している。この旧河道自体は古墳時代末から奈良時代にかけて埋没し、中世には窪地状の流路をとどめていたものと推測できる。遺跡は旧河道の南岸に近接して、ほぼ東西に竪穴住居跡群が存在し、微高地西端の墳丘墓群に連続する。住居跡と墳墓の構築時期は大きく重複しており、集落の構成としては河道に沿って居住域が存在し、その西には近接して墓域が存在したことになる。以上廻間遺跡は3～4世紀という弥生時代～古墳時代にいたる過渡期に存在する濃尾平野低湿地帯の集落であり、5世紀をまたずに集落は消失していったものと考えることができる。

濃尾平野に見られる集落の急激な変動は新しい時代<古墳の時代>を予見する出来事であり、古墳文化定着への動きと考えることができよう。大集落の解体とともに出現した新しい集落への具体的な調査は、こうした歴史的な出来事を研究する上で大変重要となってくるのであり、廻間遺跡はこれらの事柄に対し多くの情報を提供してくれるのである。

(赤塚次郎)



廻間遺跡遺構配置図 (1:1600 20m方眼)

SD01は旧河道、南西隅の平行線は微高地の端を表わす。

網点は墳丘墓(SZ01~06)、方形又は長方形の図形は竪穴住居跡を表わす。

## 清洲城下町遺跡

清洲町教育委員会

清洲城下町遺跡の調査は、名古屋環状2号線の建設に伴って、(財)愛知県埋蔵文化財センターが主体となり進められてきた。昭和57年以降の調査により、等閑に付されてきた清洲城下町の歴史的解明作業は飛躍を見たが、同時に新たな問題提起もなされている。いずれにせよ現在のところ解明の端緒を得たにすぎない。

清洲城及び城下町の形成・発展過程上、歴史的転換となったのは、織田信雄の実施した修理・拡張(天正14年・1586年)であった。

そして、信雄の計画的な城下町の形成、特に掘割の復原作業は、「清須村古城絵図」等によりほぼ現地地形上にドットできる精密さで完成されつつある。しかし、下津城(稲沢市)焼失後(1476年)、尾張守護所が清洲城に移された頃や織田信長が清洲城に入城した頃(1555年)、即ち戦国型城下町としては不明な点が多く、清洲城下町の研究上最も遅れているところである。こうした状況で実施した調査であったが、予想を越える成果が得られた。

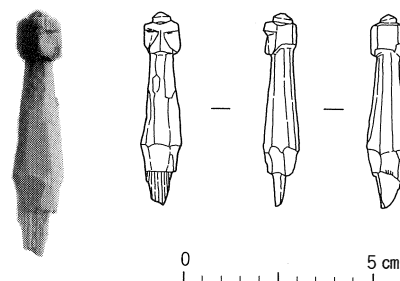
今回は、清洲町が城下町遺跡を本格的に取り組んだ初の発掘調査となった。

調査対象地は、現本丸跡地の五条川(内堀の一部)対岸に位置し、南・北2か所で計900㎡であった。注目される溝が各調査区で確認できた。北調査区の溝は幅17mを測り、主軸は東西方向となる。溝の北肩は杭列を伴うテラス状となる。溝は16世紀前半期に掘削されたが、その後人為的に埋め戻されており16世紀の末には完

全に平坦化している。一方、南調査区の溝は幅7mを測り、主軸は南北方向となる。溝の両肩には木組みによる2度の護岸工事を行っていた。溝は長期間使われたらしく順次埋没していったようである。2本の溝の関係は、主軸・溝断面の形状・存続期間等が異なる事から、性格の違う溝であろう。又後者の溝の西側では屋敷地を想定させる遺構が確認されている。しかし、共に16世紀前半期に掘削されている事は、戦国型城下町期の遺溝に相当する。だからと言って直ちに16世紀前半期の掘割とするかは、資料の増加を待って検討しなければならない。

出土遺物は質・量ともに豊富かつ時間幅もち、清洲の歴史の深さをよく物語っていた。土器類では16Cの施釉陶器が中心をなすが、それ以前の奈良・平安期の須恵器や無釉の山茶碗も多く、灰釉陶器を欠く事実と共に城下町形成に至る歴史的解明に重要な資料を提供した。又木製品として漆椀・箸も出土したが、特に下に図示した全長5.2cm、最大胴径1.2cmを測る人形や木筒等は新たな資料として注目されよう。

(貝殻山貝塚資料館 主任 高橋信明)



## お・知・ら・せ

- ・埋蔵文化財展 (無料)  
豊田市棒の手会館 特別展示室  
8月15日(土)～8月27日(木)
- ・埋蔵文化財講演会 (無料)  
豊田市棒の手会館  
8月23日(日) 午後1時30分～  
演題 「先史時代の愛知」  
講師 信州大学 大参義一教授

- ・基礎研修会  
産業貿易館 9月8日(火)～9月9日(水)  
市町村の埋蔵文化財担当者を対象とする。
- I. 埋蔵文化財行政の現状と課題
- II. 遺跡調査の方法
- III. 発掘調査に関する予算編成の実際
- IV. 補助金制度の活用
- V. 出土遺物の保存と活用

## 愛知県埋蔵文化財担当専門職員名簿（昭和62年5月1日現在）

県市町村名	所 属	電 話		県市町村名	所 属	電 話	
		職 名	氏 名			職 名	氏 名
愛知県	教育委員会文化財課	<052>961-2111	主 任 赤 羽 一 郎 教育主事 遠 藤 才 文	豊橋市	美術博物館	<0532>51-2621	学 芸 員 水 野 裕 之 〃 野 澤 則 幸 〃 伊 藤 正 人 〃 服 部 哲 也 〃 竹 内 宇 哲 〃 伊 藤 厚 史 〃 千 田 嘉 博
	埋蔵文化財調査センター	<052>961-2111	所 長 伊 藤 稔 主 査 加 藤 安 信		一宮市	博物館建設準備事務局	<0586>72-2343
	陶 磁 資 料 館	<0561>84-7474	学芸課長 柴 垣 勇 夫 学 芸 員 浅 田 員 由 〃 仲 野 泰 裕 〃 井 上 喜 久 男 〃 野 末 浩 之	瀬戸市	歴史民俗資料館	<0561>82-0687	局 長 岩 野 見 司 主 事 土 本 典 生
名古屋市	教育委員会文化課	<052>961-1111	学 芸 員 小 島 一 夫 〃 山 田 敏 一	半田市	市立博物館	<0569>23-7173	館 長 立 松 宏 学 芸 員 山 本 恭 弘 〃 近 藤 英 正
岡崎市	教育委員会社会教育課	<0564>23-6439	主 事 荒 井 信 貴 嘱 託 川 崎 みどり 〃 伊 藤 久 美 子	尾西市	歴史民俗資料館	<0586>62-9711	館 長 宮 石 宗 弘 学 芸 員 藤 澤 良 祐 嘱 託 服 部 郁 人 〃 松 澤 和 人 〃 大 蔵 順 子
豊川市	教育委員会社会教育課	<05338>5-2111	主 事 前 田 清 彦	蒲郡市	郷土資料館	<0533>68-1881	主 査 小 笠 原 久 和
豊田市	教育委員会社会教育課	<0565>31-1212	副 主 幹 田 端 勉 主 査 伊 藤 達 也	常滑市	民俗資料館	<05693>4-5290	学 芸 員 中 野 晴 久
西尾市	教育委員会社会教育課	<0563>56-2111	主 事 松 井 直 樹	尾西市	歴史民俗資料館	<0586>62-9711	学 芸 員 伊 藤 和 彦
小牧市	教育委員会社会教育課	<0568>72-2101	主 事 中 嶋 隆	知多市	民俗資料館	<0562>33-1571	館 長 杉 崎 章
稲沢市	教育委員会社会教育課	<0587>32-1111	主 事 北 條 献 示 文 化 財 調 査 員 日 野 幸 治	新城市	文化会館	<05362>3-2122	主 事 渡 辺 敬 一
新城市	教育委員会社会教育課	<05362>3-1111	主 事 夏 目 勝 雄	清洲町	貝 殻 山 貝 塚 資 料 館	<052>409-1467	主 任 高 橋 信 明
東海市	教育委員会社会教育課	<052>603-2211	主 査 立 松 彰	武豊町	歴史民俗資料館	<0569>73-4100	館 長 磯 野 幸 男 学 芸 員 補 奥 川 弘 成
知立市	教育委員会社会教育課	<0566>83-1111	主 事 補 岡 本 茂 史	三好町	歴史民俗資料館	<05613>4-5000	館 長 安 田 幸 市
一宮町	教 育 委 員 会	<053393>3111	主 事 須 川 勝 以	足助町	足 助 資 料 館	<0565>62-0387	館 長 鈴 木 茂 夫 主 事 鈴 木 昭 彦
幸田町	教 育 委 員 会	<0564>62-1111	学 芸 員 栗 田 真 澄	設楽町	町立奥三河郷土館	<05366>2-1440	館 長 鈴 木 富 美 夫
名古屋市	見晴台考古資料館	<052>823-3200	学 芸 員 野 口 泰 子 〃 平 出 紀 男 〃 木 村 有 作				

## 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 名簿一覧

## 役員

理事長 中根昭二  
 常務理事 中林茂  
 理事  
 小金 潔 県教育長  
 井関 弘太郎 名古屋大学教授  
 伊藤 秋男 南山大学教授  
 大参 義一 信州大学教授  
 坪井 清足 (財)大阪文化財センター理事長  
 檜崎 彰一 名古屋大学教授  
 花木 薫雄 都市教育長協議会会長  
 (一宮市教育長)  
 大溪 紀雄 町村教育長協議会会長  
 (吉良町教育長)  
 下田 修司 県土木部長  
 中神 秀雄 県教育委員会社会教育部長  
 林 正治 清洲貝殻山貝塚資料館長  
 (清洲町長)  
 日下 英之 県陶磁資料館館長

## 監事

石原 坂男 県出納事務局次長  
 龍野 等 県教育委員会総務課長

## 専門委員

考古学 檜崎 彰一 名古屋大学教授  
 文献史学 早川 庄八 名古屋大学教授  
 地理学 井関弘太郎 名古屋大学教授  
 建築史学 浅野 清 愛知工業大学教授  
 動・植物学 渡辺 誠 名古屋大学助教授  
 形質人類学 池田 次郎 岡山理科大学教授  
 保存科学 江本 義理 前東京国立文化財  
 研究所保存科学部長  
 岩石学 諏訪 兼位 名古屋大学教授  
 木材組織学 木方 洋二 名古屋大学教授

## 職員

事務局長(兼管理課長) 太田正男  
 管理課  
 主査 青山 光一  
 主事 鈴木 孝治 田上 堅三  
 大野 智靖 小倉 晴美  
 調査課  
 課長 明壁 正毅  
 課長補佐兼主査 鷲野 勉  
 主事 小澤 一弘 石黒 立人  
 主査 梅本 博志  
 主事 宮腰 健司 佐藤 公保  
 水谷 朋和  
 嘱託 松田 訓  
 主事 平田 睦美  
 嘱託 飴谷 一  
 主査 細野 正俊  
 主事 鈴木 正貴  
 嘱託 中野 良法  
 課長補佐兼主査 山田 耕治  
 主事 後藤 浩一  
 嘱託 佐伯 二郎  
 主事 浅井 和宏  
 嘱託 丹羽 博  
 主事 森 勇一 樋上 昇  
 主査 平野 清  
 主事 赤塚 次郎 山仲 廣司  
 松原 隆治 神谷 友和  
 主査 土屋 利男  
 主事 池本 正明  
 酒井 俊彦  
 嘱託 野口 哲也  
 (昭和62年5月1日現在)

## センター日誌

## 役員の変動

理事長辞任 3月31日 小金 潔  
 ♪ 就任 4月1日 中根 昭二

## 職員の変動

斎藤 樹三 消防学校へ  
 森 信孔 名古屋給与事務所へ  
 橋本 雅司 海南高等学校へ  
 清水 雷太郎 尾西市立第三中学校へ  
 竹内 尚武 国府高等学校へ

梅村 清春 藤岡町立藤岡中学校へ  
 長島 広 春日井南高等学校へ  
 (4月1日付)

## 埋蔵文化財愛知 No. 9

発行 昭和62年7月  
 編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
 〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号  
 名駅パークビル9F  
 TEL 052-586-3155  
 印刷 東海プリント社